

第4回 滋賀県社会教育委員会会議における会議概要

期日：平成22年（2010年）3月2日（火）

場所：県庁新館 7階大会議室

1 開 会

○県教育委員会生涯学習課長挨拶

2 議 事

(1) 平成22年度社会教育関係団体・機関等の補助金交付について

(2) 提言内容の検討

テーマ「住民同士が学びあい、住民相互が支えあう地域のきずなづくり」

(3) その他

3 閉 会

出席委員（五十音順）

石橋委員、今居副代表、宇野委員、織田代表、小巻委員、鹿田委員、千歳委員、多田委員、津屋委員、中野委員、野部委員、藤森委員、山口委員

県教育委員会生涯学習課長挨拶

皆様、こんにちは。本日は、ご多用のところ、ご出席をいただきまして、厚くお礼申し上げます。

平素は、皆様方には、本県の生涯学習の振興に格別のご指導とご支援を賜りまして、深く感謝を申しあげます。

さて、委員の皆様には、平成20年の7月2日にご就任をいただきまして以来、本日で第4回目の会議になります。今期は、「住民同士が学び合い、住民相互が支え合う地域のきずなづくり」をテーマにご提言をいただくこととしまして、全体会での議論に加え、8名の専門委員の皆様にも、現地視察も行いながら、6回に渡ってご議論をいただいております。大へんありがとうございました。

本日は、これまでのご議論をもとに、事務局でとりまとめました提言案につきまして意見交換をいただければと思います。

最近、「無縁社会」をテーマにした番組が放送され、人と人のつながり、きずなが薄れ、日本の社会が変わってきている実態が提起され、反響を呼んだところでございます。

この番組の問題意識は、社会教育委員会会議で2年間ご議論いただきましたテーマと共通したものがございます。今回の提言は、今、滋賀の地域社会が抱える大きな課題につきまして、問題を提起し、社会教育の観点から将来に向けてのご提案をいただくものですので、しっかりと受け止め、また周知も図ってまいりたいと思っております。

また、本日のもう一つの議題としまして、「平成22年度の社会教育関係団体、機関等への補助金の交付について」がございまして、



平成22年度の県の予算案につきましては、現在、県議会で審議中でございますが、皆様ご承知のとおり、世界的な経済危機の影響もございまして、県の財政はまさに「非常事態」ともいえるべき危機的な状況でございます。

こうした中、社会教育関係団体等への補助金につきまして、財政構造改革プログラムを踏まえながら、予算案に計上させていただいております。社会教育法第13条に基づき、社会教育委員会のご意見をいただこうとするものであります。

ご報告でございますが、本県では、「学びあう楽しさ 生かし役立つ喜び」を基本目標とし、滋賀の生涯学習社会づくり基本構想を策定し、総合的な生涯学習施策を推進しているところでございます。

この構想の計画期間が、平成22年度までとされているため、現在、基本構想の見直しに取り組んでおります。そのご議論をいただく滋賀の生涯学習社会づくり推進協議会には、県社会教育委員からも3名の方に参画をしていただいております。

県民や団体・NPO、大学、企業や行政などみんなが生涯学習に取り組んでいくための指針となるような構想にしたいと考え、県民意識調査を実施したり、社会教育関係団体などいろいろな方からご意見をいただいたり、ホームページでも意見募集をするなどして来年度の策定に向けて取り組みを進めております。

委員の皆様にもご意見をいただくなどご理解、ご協力いただければと存じますので今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

限られた時間の中ではございますが、実りある全体会にさせていただきますよう、よろしくお願いいたします。

議事の概要

【代表】



この度、過労等で休み、ご迷惑をおかけしましたが、現在元気になりました。

社会が孤独化し、現在の社会状況として、自殺者が年間3万人を超える状況が続いていたり、若い世代に勝ち組、負け組と言われるなど厳しい状況があって、早くに脱落していく恐怖感や孤独感を持っています。

一方、バンクーバーオリンピックでさわやかな場面を見ることができました。フィギュアスケートで、けがした選手がコーチを含めいろいろな人の支えで、復帰していく姿を報道したのは良かったと思います。そういうのを見て勇気や力を得た、すばらしい二週間でした。

今回の提言作成に向け、現場を見せていただいたり、研究をさせていただきました。限られた時間の中で文章にまとめるのは至難の業ですが、私たちの到達点を確認してきたいのでご審議をよろしくお願いいたします。

それでは、議事に入ります。最初に、平成22年度の社会教育関係団体・機関等の補助金について事務局から説明をお願いします。

【事務局】

平成22年度社会教育関係団体・機関等への補助金について説明しました。

【代表】

ただ今の説明について、ご質問やご意見はございませんか。

【委員】

補助金の中には、昭和26年から始まったものがあり、当初から変わってきていると思います。県内の青少年団体について、補助するのはこれらの団体だけでいいのか、また、21年度と比べてどうなっているのかなど教えてほしいです。

【委員】

過去の比較ですが、青少年団体については同額です。ただ、参加者が減っている団体については、補助の見直しをさせていただきました。会員数、活動の範囲などを見させていただいています。会員が減少している団体もあり、精査していきたいと思います。

【委員】

会員数が減少していても、県として力を入れていきたいという所は増やしても良いと思います。昔から補助をもらっているから今年ももらう、というようにならないようチェックしていればいいです。

【事務局】

補助金が有効に使っていただいているかを踏まえて対応させていただきたいと思っています。新しい団体への補助については難しい状況です。

【副代表】

社会教育を盛んにするには、青年の力が大きいと思います。青年団の活動がどこの市町も力が無くなってきているように感じます。今の情勢では、仕事のことで精一杯という人が多いので仕方ありません。

県として何か力を入れているのでしょうか。

【事務局】

青年活動に参加しやすいように企業さんに文書を送付したり、知事が行事に参加して激励するなど支援をさせていただいています。担当者もできる限り、団体の活動に顔を出すようにしています。

【代表】

それでは、ここからは次の議事であります、提言内容の検討に入りたいと思います。

【事務局】

提言（案）について説明しました。

【代表】

委員からのご意見をお願いします。

【委員】

現在、勝ち組と負け組がはっきり分かれています。少子高齢化という事で、私らの小さい時、子どもは4人ほどでしたが、今や1人、2人というのが普通になってきました。

それとともに、私ども、団塊の世代は、20年後ぐらいには何百万人単位で亡くなっていきます。そういう背景を考えて、この文章をずっと読んでいますと、今まで2年間かけて、いろいろ私も聞いて、活動させていただいて、この文章で私はいいと思います。

コーディネーターという概念は、難しいですね。

日本は、教育力は非常に高まったけれども、人間力というか、生命力は、ほとんど見るかげもないと考えています。そうした時に、コーディネーターの役割として、企画力とか、調整能力というのは書いてあるんですけども、人間力について少し見えれば、いいのではと思います。

【委員】

文化ボランティアコーディネーターの大会に行ってきました。そこでは、コーディネーターというのは何かということが不明確なところで議論をしていました。

イギリスの研究者の方が来られたんですけど、イギリスではコーディネーターという言葉はなく、マネジメントという言葉はあるとお話しされていました。

そういうことをふまえて私自身、コーディネート力というものが大事なのかなというふうに思います。

コーディネーターに一番大事なものは、かくたる理念というか、さっき人間力とおっしゃったんですけど、信念的なものですよね。コーディネーターの仕事は理念、志がぶれないというのが大事で、活動するうちに必要な学びを自分が得て、気がいたら専門性が身についていくことになるのかなとは思っています。

私たちの学習支援センターでは、コーディネートするということは、必ず実施の時に現場にいます。終わってからの反省会をして次につなげています。ただ繋いだけで、コーディネートしましたと言ってしまったら、コーディネートっていうのは、安易なものになってしまいます。

現場を見届けたのかどうかということが、コーディネートするということの大事な基準になるのかなというふうに思います。

必ず現場に行って、見届けていますという一文が入ると、打って響くものになるし、コーディネートという言葉の曖昧さが消えていくような感じがします。

コーディネーターは、事業の始まりから終わりまで現場を見届ける、そして次に繋げていくことが、役割ではないか、それをすることによって、現場で学び、コーディネーターの専門性が高まっていくというような一文があると、動きが見えるかなと思っています。

2ページの下から3行目の「例えば」のところですが、

「かつては、お寺や教会において人々が自然に交流していた場が存在していた」とあるのですが、私が子どもの頃を思うと、隣近所はもう自然に交流の場であり、町内会とか子ども会とかが交流の場だったように記憶しています。

保育所・幼稚園といった場のみならず、児童館とか図書館とか、公民館、そういったところが、



しかけ作りを一生懸命されてるのが公の場で、そこで足りないところを支援ボランティアやNPOが隙間を埋めてるのかなと思って読みとりました。

【代表】

まちづくりの世界を30年近く見てきてますけども、そのリーダーは、そういう調整役とか、プロデュース、マネジメントしています。ただ、時代がこう変わってくると、非常に複雑で、最初から最後まで、ちゃんと現場に来て、見届けるということまで含めると、ものすごく大変な仕事です。

コーディネートは難しいですし、何かこう社会的な仕組みっていう、システムにもうちょっといけないかっていう思いで、問題提起で止まっているところがあります。

コーディネートする力っていうものを、表現したいと思っています。

人間力というのは非常に日本的な感覚っていうか、日本語として非常にいい言葉で、聞いていると非常にうなずくんですが、文章化したときに、「人間力って何？」と、またそれで議論になってしまいます。

【委員】

改めて読ませていただいて、提言を読んだ人が、じゃあどうすればいいの、私はどのポジションで、何を働けばいいの、という記述が少し足りないのかなという気がしました。

絆というキーワードがあまりにも難しい、フレーズが多すぎる、個人対個人の絆もあれば、個人対地域というか集団もあれば、小学校区もあれば、もう少し大きな地域というものもあれば、市町村というものもあります。

一番基本的な絆作りをするベース、基本単位が今崩れています。それを繋ぎ止めるのに、公共の空間を使ったり、公共というものがコーディネートを行って、絆を作る仕掛けを一生懸命することが大事です。

でも、それは作られた絆です。自然発生的に絆ができるかっていうと、そういう社会で今なくなっています。絆というのは人と情報との界面だと思ってます。その界面の境界線に出てくるのが、本だとか、パソコンだとか、インターネットだとか、テレビだとか、そういうくっつく面がいくつかあるのですが、実際人と人とがくっついていく、その絆っていうのはどうやって紡ぎ出せるのか、と思います。

絆を作ろうとしたけども、絆のようなものはできました。思い出はできたけれども、しっかり接着しなかったみたいなことが起こるんじゃないかと考えます。

【委員】

今、お話伺っての感想なんですけども、コーディネーターとコーディネート力っていうのはすごくよく分かるんですが、受け入れ側の視点があまりなくて、繋ごう繋ごうというばかりで、繋ぐ人の思いだけでは難しいのかなと思いました。

団体さんが自分たちで何とかしよう頑張っている、でもそれはやっぱりできないので、繋がる、開くように活動している。そのためにいろいろなトラブルも起こると思うんですけども、そこでコーディネートが必要だねってことになると思うんですが、それに気づかないところで、じゃあ、繋がらましようというコーディネートをやろうとしても空回りすることが多いのかなと私の中では思いました。

そういう意味で、受け入れ側の気づきについて触れられたらいいのかなと思いました。

もう一点。この提言は、今あることをこう活用すれば、よくなったというような提言に私は読みまして、その住民とか地域の中に人がいないってことが、そもそもの問題であって、地域活動に携われる人っていうのは限られています。

これ以上何を頑張ればいいのか、というように捉えられたらちょっと怖いと思います。

地域に携われる人を増やすため、学生が地域活動にも入って来るといえることがあるといいのではないのでしょうか。

【委員】

この提言は、ワーク・ライフ・バランスの問題にも関わると思います。滋賀県の社会教育委員会会議で整理したものを読むと、私たちがやってることは決して間違っていないとか、もうちょっとやろうねっていう気になるような応援歌なり、実践をしていくテキストの基本のようなものになるかというのではないのでしょうか。

【委員】

「住民同士が」、「住民相互が」というところで、小学校区の中での繋がりというようなことを書かれているのが今回の提言じゃないかなというふうに改めて思っています。

やはり、生涯学習の大きな流れの中で、支え合うことを担ってるのが生涯学習だということを、県民の方が改めて、これを見て、気づいていただくと言うことが、すごく大きいんじゃないかと思います。

生涯学習で学んだことを生かすというところぐらいしか、私たちの気持ちの中では、生涯学習のイメージはなかったかと思います。もう一步、踏み出して、いわゆるおせっかい、何か気になったところがあったら、足を踏み入れようとか、学校にどんどん足を入れてみようとか、学んだことを生かすだけじゃなくて、自分が持つて何でもいいから、ちょっとこう、あの人と繋がろうというような動きをすることが生涯学習なんだよということを、この提言はいつているようなことを感じます。

そういう意味で、先ほどもありました、コーディネーターが、本当にぶれないものを持つてることが大事だと思います。生涯学習を進める中で、小学校区を単位とするということは、色々な思いの中で、子ども時代を過ごした小学校にふるさとと繋げて、ふるさと意識を大事にしていこうというような動きが、見えてきています。

【委員】

コーディネーター、コーディネーターとかコーディネーター力っていうことについて、今おっしゃっていたみたいに、私の言葉で言うと、あえて人と関わろうとする力とか、あえて人と関わりたいと思う心とか、それを持つている人とかという言い方になります。

人と繋がりたいと思うのは、本能的に誰もが持つてるものだと思いますけれども、それが思っているけれども、色々な制約で出し切れない状況になっているような形があるのかなと思います。

【委員】

ちょっと重複するような感じもするんですけども、合併した市の様子を見せていただいていると、いろいろなグループが、多種多様に、目的を持って、立ち上がっているのに気づかせていただいて、自分たちの目的を持ったグループはこんなに威力があるということに、すごく感心させられました。

例えば、赤ちゃんを母乳で育てる会とか、小さなグループがたくさん立ち上がってるんですが、そのグループさん同士を繋げようかということになってくると、これはまた拒否されることがあります。自分たちの好きな相手や、意見が合う相手とではグループができるわけですがけれども、じゃ、それを隣へ繋ごかということになってくると、拒否される場所が多くて、だから逆に細かいグループがたくさん出来上がってるのかなというふうに感じています。さっき言われている、コーディネートを考えてみますと、なかなか大変な仕事かなというふうに感じさせていただいてます。

【代表】

コーディネーター力も必要ですが、学校の先生方に、あなたコーディネーター担当ですよと、校務分掌で決まって、やれなかったって出来ないです。コーディネーターという別人格の人がいるんじゃないのかということが、問題提起です。

コーディネーター力を高めるという具体的な話と、人を置かないと、これからだめじゃないのということを両方考える必要がありますが、金の切れ目が縁の切れ目になることが多いです。

システムとして持続するかという課題があるというところで止まってるんですよ。

コーディネーター設置は効果はあります、というところまで検証されている。だけど、どう持続するかのシステムっていうのは大きな課題になっている。結局、人の問題とお金の問題があるわけです。

【委員】

絆について、私が思うのは、地域と住民同士の絆というよりも、一言で言えば、世代間の絆だと思って、家で言えば親と子、家族の絆のことだと思います。

家庭だけで子どもの教育はできないから、地域で考えましょう、というのがこの提案だと思うんですね。

【委員】

2年間、皆さんで出し合ったものをわかりやすく、思いを伝えていただいているなと思って読ませていただきました。

社会教育委員に参加させていただいて、初めて、県内でこんな活動があるんだとか、色んな地域でこんなことされてるんだとか、たくさんを知ったんですね。でも、結局私の周りの、まあ、たくさんいる友達なんかは全く知らない方が多い。

こんなことしてるんやという場を、行政の方とかその施設の方とかの力によって、もっと訴えていただく。開いていっていただけると、参加もしやすいし、眠っている人材も、増えていくんじゃないかなと思っています。

【委員】

社会教育委員のメンバーの方は、それぞれのところすでに活躍され、コーディネーター、それこそコーディネーター力をお持ちになって、活躍していらっしゃるってことで、不備なところも出てくるかもしれませんが、この提言を今度具体的にしていくわけですから、そこに出てくるものが今、意見として出てきてるんじゃないかなというふうに思います。

生涯学習課が、この提言を受け、おそらくこれを各市町にお伝えになるだろうと思うのですが、そういう時に生涯学習課が計画を持っていただきたいなあと思います。

私も1つの会を持ちながらいろいろやってるんですけど、地域のお母さんの団結力、組織力に、本当に感心することばかりなんです。私たちが50人しか集められない時も、200人ぐらいの人を集めて、きっちりとやってらっしゃる。



2年間で、これだけのものだけに縮小してしまうのは非常にもったいない資料がいっぱいあるのではないかなと思います。これらの資料を次のステップで生かしていただいたらいいのではないかなと、私は思っております。

【委員】

話を聞いて思ったのは、派遣社会教育主事制度がなくなって、地域の社会教育の元気がなくなってきたように思います。これもお金が関わっていて、予算がつかなくなったら、同じことに起こるのかなっていう気がしてしまいました。

初めて県内の社会教育の例を見せてもらいましたが、コーディネートシステム、コーディネート能力、コーディネーター、地域コーディネーターなどいろいろな言葉があるので、コーディネーターっていう言葉を全部省いちゃって、コーディネートシステム、コーディネート能力だけで表現してしまうと、少しはわかりやすくなるかなと思います。

うちの家族が小学校でボランティア活動に行ってるんですけど、行ってる中で、学校に来てるボランティアのお母さんとか、おじいちゃん、おばあちゃんなんかの話を聞きながら、クラスがよくなってるよねという現状を見ることによって、更にそこでやっぱりネットワークを作れるのかなと感じています。

下からネットワークが出来てくるっていうのを、やっぱりどこかで支えていかないといけないし、学校や地域で、そういうシステム作りの輪とか、芽は出てきているのかなと思います。

【委員】

課題ということでおっしゃっていただいていたと思うんですけど、小さなグループがあるけど繋がらないってことは、ちょっとマイナスだと思うんですけど、その小さなグループができていて、また、何か活動をしていることは、プラスのことだと思うので、お金はないけど、すごいパワーはあるって、先ほどおっしゃてみたいなお母さんたちが、たくさんいらっしゃるということが財産で、それをどう生かしていくのかっていうところが課題と思うんですね。

コーディネーターとして求められる能力ってとても1人ではできないかもしれないですね。けれど、例えばグループの中に、いろいろな人がいたら、この能力はこの人、このことならあの人、というのがあれば、オッケーなのかなとちょっと思いました。

コーディネーターという具体的な人を求めていくことなんだけど、例えばあなたのグループで、こういう能力はありますかというのもいいと思います。

【委員】

うちの学生が卒論の時に、その読み聞かせをしてる人たち、参加してる人がどういう意識を持っているか、参加したことによって、自分自身がどう磨けたかっていう調査をしたことがあります。

そこで私が思ったのは、横の繋がりを持つことが必要ということです。

自己満足で終わってしまってるんですね。自分は勉強できました、それからこういうものに参加して、子どもを知ることが出来ましたとかいっぱいあるんだけど、そこ止まりなんですよ。そういうものの横の繋がりっていうものが、今後更に必要で、それらを繋いでいくのが、組織というか、地域づくりに関わってくるのかなと思いました。

【副代表】

提言というのは、難しいなあという実感があります。ただ、今回、答申ではなく提言という形で出してもらうのは、この内容でいいのかなと思っています。

ここにお集まりの皆さんがそれぞれ素晴らしい活動をされている方ばかりですので、色々でた意見をですね、非常に貴重な、また肝心なことばかりやったと思います。

全国の大会とか研修とかに出席させてもらうんですけども、滋賀県はようやっているなあ、と思います。

滋賀県は、比較的若い県で、たくさん他府県から入ってきていただいています。

新しい何かを注入して、反応する。これを活性というんだと思うんですね。ですから、滋賀県はそういった面では全国1位じゃないかと思っています。

今度の提言を読んでいただいて、私も頑張ろう、というような気持ちになって、それが、広がっていくような形で、滋賀の社会教育がどんどん進んでいけばいいなと思っています。

あと、私はいつも残念に思うのは、学校教育の方ばかりに目がいて、学力テストや体力テストがどうやこうやとか、上位の10位に組み込めとか、こうおっしゃられる方がおられます。それもそれでいいかと思いますが、やっぱり、子どもたちを育てるとしたら、社会教育を進めていくこと、私たち大人がもっと頑張らないといけないということを、もっと全体を引っ張るようなことを皆で考えていかないといけないな、という気もしています。

【委員】

私が前々から言っているのは、こういう絆づくり、地域づくりを保証する空間、場というものをいつも開いて、皆が来れる場所として、きちんと保証するというか、いつも待っていますよ、開いてますよということを住民の皆様によく知らせていくことが必要だろうと思います。

お金の心配はせず、空間を提供しますよっていうことを保証してあげられる公共空間が、公民館や図書館だけじゃなくて、自治会館、コミュニティーセンター、合併によって生まれ出た空間があるはずですよ。

そういうところをボランティアの人たちも使えるんだよっていうことを、言っていければ、応援歌になるような気がします。

【委員】

今回の提言のキーとなる生涯学習課が、キーワードの発信をしてくれると、これが必ず形につながっていくのかなと思います。

私は、いろいろな方との出会いがあって、NPO活動から今コーディネーターっていうことで、宣伝できる立場になれて幸せなんですけど、地域協働合校の中で、痛感したのは、結局子どもたちは地域を愛する心とか、地域を誇りにする心をどうやって育てていこうっていうところが、ずっと一貫としてあったような気がします。

やっぱり原点はそこだなって感じました。

生涯学習課で、つなぎセンターみたいな形を担っていただきながら、私たちはまた個々のフィールドの中でコツコツつなぎ役に努めていきたいと思っています。

【代表】

スタート時点の2年前ぐらいから、いろいろな議論が出て、どんな研究、どんなことができるかなってことで、可能性は無限大だったんですが、だんだん日を追うごとに、紙にまとめて、人に伝えることが難しいことを痛感しています。

くどいようですが、提言のタイトルが原点になりまして、生涯学習、あるいはその社会教育の世界で、個人がそれを生かして花開かせるっていうところまで、取り組んできたました。だけど、いろいろな社会問題に対して、人もそうですし、団体も開いて、地域という単位で取り組みを進めるように訴えることが必要です。



2番目に、やっぱり理想を掲げないといけないだろうと思います。

下から盛り上がるような形で、様々な取り組みが出来ているというのを事例で、散りばめて表現して工夫しています。

ただ、長年の積み上げを、たった10行の文章や、1枚の写真で表現するっていうのは、これはもう絶対無理な話です。ですけど、もっと先にいけるんじゃないかというような思いなんかも含めて書き込んでるつもりです。

3点目に、地域単位でいろいろなものを進めていくときに、今までも各小学校なら小学校、公民館なら公民館、図書館なら図書館だけでは難しいという問題意識があって、いろいろなものを組み合わせた方がもっとよくなるということに、日本社会全体が気づき始めてるんだと思うんですね。

教育委員会も厳選して、1つ2つでも反映していただきたいと思います。

この提言を作るまでの資料とか、途中の議論、現場、膨大な資料がありますので、行政側で、吸いにとって、改善してくとかいうか、半歩前に出るっていうことへの努力はしてほしいなと思います。だめな場合はだめでしょうがないですけども。

こんなご時世というのは、行政がしぼんでるように見えますけれども、一方で、数値化できない文化度とか、文化的なパワーとか可能性っていうのは、お母さん方のパワー、それに学生なんか見ても、すごいなと思います。

ティーチャーよりもコーチングです。そうやって小さな糸口から、いろいろな人の可能性を引き出すようなことが、我々、委員の宿題です。ストーリーをつくらせていただきたいなと思います。そうすれば情報化社会ですから、ひっかかってきます。

生活活動の実態調査なんか見ますとね、まちづくりの参加度っていうのは全国で、滋賀県は2位です。そういうレベルを高めていくことができるかなと思っています。

あとは代表、副代表ならび事務局で精査して、整理をして、提言として、教育長にお渡しするというような方向でいきたいんですけど。よろしいでしょうか。

半年間ダウンしてましたので、皆さんにご迷惑おかけしましたし、心配もおかけしました。でも、何とかこの日を迎えたことを非常に喜んでおります。どうもありがとうございました。

私の方の進行はほぼ終わったように思いますので、事務局、よろしくお願いします。

【事務局】

委員の皆様方に終始熱心にご協議いただきまして、ありがとうございます。

今後につきましては、本日のご意見をまとめ、提言として、県の教育長に、手渡していただきます。そして、各市町の社会教育、生涯学習の所管課、県庁の関係各課の方にも配らせていただきたいと思っております。

あわせて、生涯学習課のホームページ「におねっと」で全国の方にご覧いただけるようになりますし、県教育委員会にも報告をさせていただくことを予定しているところです。

事務局といたしましても、反映できるところから、取り組む努力をさせていただきたいと思っております。

委員の皆様方におかれましても、それぞれ関係、所属されておられます会とか、団体等で提言の内容を広めていただければ、ありがたいと思います。今日はどうもありがとうございました。